

『大正三年1914 桜島大爆発の思出集』について

「鹿児島近代」教育研究センター 客員研究員 林 匡

本稿では、筆者が『近現代センター通信』第2号に掲載の「忘れられていく学校の記録」で紹介した、旧県立鹿児島西高等学校（定時制夜間・昼間課程、通信課程を有し

た。）関係の資料（現在、県立明桜館高等学校保管）から、標記の『桜島大爆発の思出集』（鹿児島西高令者学級、1972）の概要を紹介する。（以下の表、巻頭言は除く。）

| No. | イニシャル | 生年 | 西暦 | 文章題 | 爆発当時場所 | 本人の状況など |
|-----|-------|-----|------|-----------|--------------------|--|
| 1 | A Y | M31 | 1898 | （無題） | 女子興業高鹿児島市上竜尾町 | 上ノ園町にあった女子興業高一年生。学校から帰宅、津波の噂、上竜尾町から鹿児島駅を経て西市来へ避難。 |
| 2 | N S | | | （無題） | 県立二高女鹿児島市仲町 | 山下町にあった県立二高女から帰宅、自宅からまず玉里邸御用人部屋へ避難、さらに伊敷街道を小山田へ避難。 |
| 3 | H A | M35 | 1902 | 桜島大爆発の体験記 | 大田小日置郡阿多村 | 阿多村（のち金峰町）大田小五年生。麦畑で近所の人々と過ごし、さらに竹山の小屋で数日過ごす。 |
| 4 | K T | | | 博多のノゾキ | 福岡県博多 | 当時6歳、博多市内で降灰を体験。 |
| 5 | O T | M35 | 1902 | ベスピアスと比べて | 県立女子師範附属小鹿児島市照国町 | 山下町の県立女子師範附属小五年生。照国から小野に一時避難、津波等のデマ。伊集院を経て日置郡へ。灰よけのセルロイドメダネが流行したことなど。 |
| 6 | N K | | | 桜島の爆発 | | 当時7歳の祝いをした数日後のこと。伊敷の先の幸加木神社まで避難。 |
| 7 | N S | M38 | 1905 | 名山小学校にて | 名山小鹿児島市堀江町 | 市庁舎の前にあった名山小学校（東隣が商業学校）二年生。田上から津波を避け伊集院方面に移動、「まん頭石駅」（上伊集院駅）で乗車、伊集院へ避難。 |
| 8 | E N | M36 | 1903 | 西田小にて | 西田小鹿児島市常盤町 | 西田小学校児童。十二日夜は外に戸板を敷く。 |
| 9 | I T | M24 | 1891 | 明石市に於て | 明石市 | 所用で明石市に。号外で「鹿児島は全滅、汽車も電信も不通」とありショックを受ける。家族は坂元町に避難。 |
| 10 | W W | M41 | 1908 | 瀬々串にて | 指宿郡瀬々串 | 地震後外で野宿。津波のデマ、地割への警戒。 |
| 11 | O K | M35 | 1902 | 伊集院の岡から | 県立女子師範附属小鹿児島市金生町 | 県立女子師範附属小五年生。武の岡下へ一時避難、地震後津波を避け、伊集院をめざし西田橋を越え、水上坂を進む。伊集院石谷に到着。海岸に一面の軽石、降灰。 |
| 12 | Y S | M41 | 1908 | 日当平にて | 鹿児島郡伊敷村下伊敷 | 当時6歳、自宅近くに歩兵第四十五連隊の実弾射撃場があり、その中に茅葺きの小屋が建てられ、桜島の避難民の一部を収容。 |
| 13 | O M | M32 | 1899 | （無題） | 始良郡溝辺村（地名玉利） | 高等科二年生。加治木方面から津波のデマでの避難民 |
| 14 | K H | M41 | 1908 | 赤フンドシ | 鹿児島市吉野町 | 当時5歳。竹山に避難後、吉田村まで避難。1月12日は爆発記念日として講話、避難訓練を行った。 |
| 15 | F Y | M34 | 1901 | 残留記 | 伊敷尋常高等小、鹿児島郡伊敷村上伊敷 | 飯山橋近く国道沿いに自宅。噴煙が毒ガスだとの噂。多くの人が今の国道3号線を、甲突川上流へ逃げる。 |
| 16 | S T | M37 | 1904 | （無題） | 曾於郡志布志町帖 | 小学三年生。兄は鹿児島の獣医研究会から帰され、加治木・国分・岩川と遠回りして帰宅。志布志も軽石混じりの降灰。近所には桜島からの移住者もいた。 |

| | | | | | | |
|----|-----|-----|------|---------------|---------------|--|
| 17 | S K | M33 | 1800 | 伊集院石谷にて | 市立高等小鹿児島市武町 | 高等小学校の授業中だった。噴火後城山に登る。その後帰宅、武岡の下に避難、地震後、西別府の西郷殿屋敷に行く。田上から伊集院町石谷に避難。 |
| 18 | H K | M30 | 1997 | 竹ヤブにて | 県立二高女 | 山下町にあった県立二高女三年生。伊敷に避難、地震後、竹藪で一夜を過ごし、犬迫へさらに避難する。 |
| 19 | T T | M38 | 1905 | 桜島の裏側で | 福山尋常高等小始良郡福山町 | 福山尋常高等小。県立二高女の姉も帰宅。重富駅辺りも桜島の避難民が大変だった。 |
| 20 | O S | | | 鹿児島市の中心山之口町にて | | 小学校入学前。海岸で見物し桜島からの避難者を見る。父は西田橋近くの馬車着場に馬車の予約に。郡山に避難するため伊敷街道を北上。夕方、郡山に到着。 |
| 21 | S H | | | 信州にて | 松本小長野県松本市 | 東市来の鶴丸小学校生だったが父の転勤で長野県松本市へ。松本小四年生の時、1月13日に松本に降灰。六年生の時、父が退職し鹿児島に戻る。 |
| 22 | K M | M43 | 1910 | 桜島大爆発の思い出 | | 出生地は鹿児島県外のため、知人S T氏（M41生、鹿児島市冷水町）から当時の思い出を聞き記載。伊敷小からさらに津波がくるとの噂で伊集院に避難したという。 |
| 23 | M D | | | 桜島大爆発追想記 | 熊本市外本山村 | 九州通信局附属電信学校生。生家は大隅南部。爆発翌日の号外で知る。当時の鹿児島郵便局は現鹿児島東郵便局にあった。石造2階建てだが地震で倒壊。 |
| 24 | M T | M34 | 1901 | 墓地にて | 海岸通り（米屋） | 武駅から串木野へ避難。12日午後6時の地震時墓地。 |
| 25 | H K | M42 | 1909 | 比志島にて | 鹿児島郡伊敷村比志島 | 竹山で生活、桜島避難民も一時避難し、さらに遠方へ。 |
| 26 | N T | M41 | 1908 | 加世田市万世町にて | 川辺郡東加世田村小松原 | 当時7歳、小学校入学前。12日夜は地震を警戒し屋外に出て休むよう注意あり畑へ。 |
| 27 | S T | M35 | 1902 | 桜島の方とともに | 鹿児島郡伊敷村飯屋 | 小学校から家に帰る。父を残し郡山の山中に避難。父は村の組長をしていたので自宅では桜島からの避難民を一時受け入れ。母方の祖父を石垣倒壊で喪う。 |
| 28 | | | | 大正三年の鉄道 | | 大正2年10月鹿児島駅から城山トンネルをぬけて鹿児島本線が東市来まで開通したことなど記載。 |
| 29 | E S | T3 | 1914 | 士魂 | | 桜島爆発当時父は台湾。伯母は谷山へ避難中、二軒茶屋で18時の大地震に遭遇、間一髪で崖崩れに遭わず。 |
| 30 | S T | M37 | 1904 | 桜島よりの移民（志布志） | | 志布志の三年女子組にも桜島小から転校生五・六人を迎える。友だちになった家の商売のことなど記載。 |
| 31 | K H | M41 | 1908 | カツボレ | 鹿児島市新町（港の近く） | 数えの7歳、岸壁に桜島からの避難民が続々上陸。その後高麗町へ。津波の噂で田上の高台に避難。 |

表に示したように、ここには爆発当時の場所、在籍した学校と学年や地域、爆発後の避難行動や当時の人々の状況、デマなどが具体的に記載されている。大正3年の桜島爆発については、例えば『桜島大正噴火100周年記念誌』（桜島大正噴火100周年事業実行委員会、2014）第2章「大正噴火」の第2節「被害」、第3節「避難」、第4節「移住」にまとめられるとともに、第6節「見聞

記抄」には私家版を含む6編が収録されている。この『桜島大爆発の思出集』には、爆発当時鹿児島市内や周辺（旧伊敷村など）で経験したものが多いが、その他に旧日置郡阿多村や川辺郡東加世田村、揖宿郡瀬々串、始良郡溝辺町や福山町、曾於郡志布志町、その他県外でのことも記されており、避難の状況や当時の風聞などもうかがい知ることができる点で貴重であろう。一

例として、表中 No.12「日当平にて」を記す。

「爆発当時、私は六才であった。電燈はなく、ランプとカンテラの時代であった。一月十二日の午後六時、いろりの近くにさがっていたランプが、突如、ガチャガチャと音をたてて大ゆれした。日当平の裏山の頂上から、山をおおうようないきおいで、次から次へと噴煙がふくれあがって、のしかかってくるようないきおいで恐しかったことを覚えている。日当平には、そのころ、まばらな農家しかなく、十数キロ先へと離れているにもかかわらず、まるで裏山の火事のように思われた。

姉は、私をおんぶして、木戸へ走り出して、しばらく身を寄せたほどであった。ちょうど近くの平地に、歩兵第四十五連隊の実弾射撃場があった。幅百五十メートル、奥ゆき一キロもあった。手前の方に、百メートル毎に射撃をする台場が、五つほど高く築かれていた。一番奥に、標的に打ち込まれた弾跡を調べるごうがあり、私ど

もは、このごうをカンテッコと呼んでいた。ここの標的が、弾痕のため、板がぼろぼろとなるのを取り替え、それを修理更新するための標的（マト）修理工場という一軒の頑丈な倉庫が、わが家のすぐ目の下にあたるところにあった。私ども、子どもたちは、マトゴヤと呼んでいた。ここに、ひとまず、一家および近所の数軒が避難した。下伊敷の住民の大部分は、小山田、伊集院へ、小山田、伊集院の住民は、つき出されるように、更に串木野方面へ避難したという。

そのうちに、射撃場のどまん中に、長さ二百メートルほどの、茅ぶきのほっ立て小屋ができた。ここに、桜島の避難民の一部が収容された。命からがらで、体一貫で逃げてきた人々である。飲料水は、井戸水にしかたよるほかない当時、こうした難民たちは、食糧と同時に、飲料水に不自由したものであろう。桜島住民の中には、その後、日当平や中福良部落へ住みついた人もあったという。」